

令和 2 年 6 月 3 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02564

研究課題名(和文)キリシタン手稿類を中心とする日本語ローマ字表記の通時的研究

研究課題名(英文)A Diachronic Study on Japanese Romanization by Focusing on Kirishitan Manuscripts

研究代表者

川口 敦子(Kawaguchi, Atsuko)

三重大学・人文学部・教授

研究者番号：40380810

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：17世紀のスペイン系手稿類に見られるローマ字書き日本語の表記は、16世紀後半以来のイエズス会資料の表記規範を受容しつつも、そこにはイエズス会資料の表記規範とは異なる、スペイン系手稿類に共通する表記規範が存在することが明らかになった。また、コリャードの著作に見られる特異なローマ字表記は、スペイン系手稿類の表記が影響した結果によるものと考えられる。キリシタン資料をはじめとする外国人による日本語のローマ字表記の実態を明らかにするためには、版本だけでなく、手稿類の表記と、手稿類から版本への表記の影響も念頭に置いた研究を行う必要があると言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語のローマ字の歴史について、その最初であるキリシタン資料ではイエズス会資料が中心的に取り上げられてきたが、本研究では日本語資料として研究が進んでいなかったドミニコ会、フランシスコ会が関与したスペイン系手稿類におけるローマ字表記の実態の一部を解明することが出来た。この成果は、スペイン系手稿類だけでなくイエズス会資料の資料性を再評価することにもつながり、日本語研究の資料に新たな可能性を与えるものとなる。

研究成果の概要(英文)：The Romanized Japanese (Romaji) notation of Spanish manuscripts in 17th century has accepted the standardized notation of the Jesuit materials which started from late 16th century, but there is also the standardized notation common to the Spanish manuscripts, which is different from the notation of the Jesuit materials. In addition, it is considered that the irregular Romaji notation found in Diego Collado's works is the result of the influence of the notation of Spanish manuscripts. In order to clarify the actual situation of Romaji notation in Kirishitan materials and other texts written by foreigners, it is necessary to study not only printings, but also the notation of manuscripts and the effects of the notations from manuscripts to printings.

研究分野：日本語史

キーワード：キリシタン資料 ローマ字 手稿類 スペイン系資料 イエズス会資料 表記

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本語史において、ローマ字については、主に「キリシタン資料(16世紀末)」、「蘭学資料(17~18世紀)」、「英語資料(幕末~明治)」が挙げられるが、従来の研究では各時代別に取り上げられ、相互の影響関係についての言及がほとんどない。日本語で初めてのローマ字表記の例であるキリシタン資料内の数十年にわたる歴史の中での変遷についても、研究が十分とはいえない。

(2) 特にキリシタン資料のローマ字表記については、従来、版本だけの研究や版本と手稿類の比較による研究、特定の筆者についての研究はなされてきたが、手稿類全体における個人差の比較や表記規範の変遷という通時的な研究はほとんど見られない。

(3) 17世紀の禁教以降も、ヨーロッパ人の東アジア拠点であるマカオ等を通じて間接的に日本語の語彙とその表記がヨーロッパに伝えられており、近代の開国以降に外国人が日本語をローマ字表記する際に、17世紀以来の表記を完全に無視することはなかったはずである。したがって、各時代で別々に位置づけられていた「外国人による日本語のローマ字表記」を、キリシタン手稿類を中心に、俯瞰的に研究する価値があるとの考えに至った。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、キリシタン手稿類を中心に、外国人によって書かれた日本語のローマ字表記の実態を、中世から近世まで通時的に研究し、近代に整備される以前の日本語とローマ字表記の関係について明らかにすることである。

(2) キリシタン手稿類のうち、日本国内だけでなく、禁教令以降の日本国外で作成された日本関係資料も収集し、ローマ字書き日本語の表記の規範性とその変遷について明らかにする。

(3) 日本関係キリシタン資料としてはあまり研究が進んでいない、ドミニコ会、フランシスコ会、アウグスチノ会が関与した資料について研究し、イエズス会関係資料と比較しながら、その実態を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 主に日本国外(スペイン、ポルトガル、マカオ、イタリア、バチカン等)の図書館や文書館に所蔵されている、キリシタン時代を中心とする日本関係の手稿類の写真複製を収集し、分析する。キリシタン手稿類は日本から海外に発信されたものが多く、詳細な所蔵目録がなく未整理の資料も多いため、現地での調査と閲覧による確認が欠かせない。海外調査の事前調査や補足調査として、東京大学史料編纂所や上智大学キリシタン文庫が収集した海外資料(マイクロフィルム)の紙焼き資料)を活用する。

(2) 収集した資料の本文からローマ字書き日本語を抽出し、翻刻と翻字(手書き文字の解読、ローマ字の日本文字への変換)を行う。それを元に、各文書のローマ字表記の実態を分析し、そこに見られる規範意識を明らかにし、その変遷と影響関係について検討する。

4. 研究成果

(1) 資料の調査・収集

イエズス会スペイン文書館アルカラ・デ・エナーレス(旧トレド管区イエズス会文書館。在スペイン、アルカラ・デ・エナーレス。以下「AESI-A」)、フランシスコ会イベロ・オリエンタル文書館(旧パストラーナ文書館。在スペイン、マドリッド。以下「AF10」)、布教聖省文書館(在バチカン)所蔵の日本関係資料の所蔵調査を行った。これらの文書館に所蔵されている日本関係資料について、日本で閲覧できる詳細な目録としては松田(1964)と東京大学史料編纂所(1969)があり、これらが現在も利用されている。

本研究の現地調査によって、松田(1964)と東京大学史料編纂所(1969)に記載されていない日本関係資料の存在を確認した。AESI-AとAF10では、両目録に記載されている所蔵番号が変更されていて新番号との対応関係が不明なものも多く、目的とする資料の閲覧請求が困難な状態にあった。現地調査では資料と目録の記述を照らし合わせて、新旧番号の照合を行った。

布教聖省文書館所蔵の日本関係文書のうち、松田(1964)と東京大学史料編纂所(1969)に未記載の文書について調査した。本文書館の日本関係資料は、これまで歴史研究の分野では活用されてきたが、日本語資料としては断片的なものであることと、大量の手稿類であるがゆえに閲覧が容易ではなく、日本語研究においてはこれまでほとんど活用されてこなかった。目録未記載の資料にいたっては手つかずの状態であり、まず日本語資料としての位置付けが必要であり、そのための調査を行った。

バチカン図書館所蔵「バレット写本」(1591年写、BAV Reg. Lat. 459)を閲覧し、マイクロフィルム資料では判読が困難だった箇所を確認した。

(2) 『日本王国記』諸本の調査と対照

スペイン人ベルナルディーノ・デ・アピラ・ヒロンによる『日本王国記』(1598～1619頃成立)は、フランシスコ会と関係が深く、写本(手稿)で伝えられているため、非イエズス会スペイン系資料の手稿類に分類できる。イエズス会ローマ文書館(以下「ARSI」)における資料収集により、既に入手していた写本と合わせて、『日本王国記』の現存する古写本6種(エスコリアル本、スペイン国立図書館本、AF10所蔵3本、ARSI本)が揃った。『日本王国記』諸本には大きく分けて3系統あるが、校訂本はスペイン内戦の影響で中断されたままであり、現在公刊されている日本語訳は異なる2系統の底本に基づいている等、諸本の関係がやや複雑で対応関係も把握しづらかった。本研究では、現存する古写本6種の対応関係を章節と丁・行単位で詳細に明らかにした。

(3) 非イエズス会スペイン系手稿類の表記規範

AF10所蔵のフランシスコ会士ディエゴ・デ・チンチョンの報告書(AF10 23-1。以下「チンチョン報告書」)には、日本文字とそれに対応するローマ字書き日本語やスペイン語訳が書かれている箇所が存在するが、これと同内容の記事が『日本王国記』にも記されている。両者の内容は一致する部分が多いが、すべて一致しているわけではなく、先行すると考えられるチンチョン報告書にはない語句が『日本王国記』に現れている例もあるため、アピラ・ヒロンがチンチョン報告書の日本語とその表記をそのまま引き写したかどうかは不明である。

チンチョン報告書と『日本王国記』のローマ字書き日本語の表記を比較した結果、以下の表記について、イエズス会の表記規範とは異なる特異な表記が両資料に共通して存在することがわかった(表1)。

表1

	規範	チンチョン報告書・『日本王国記』共通の特異な表記
サ	sa	za (Zamuray「侍」)
ス	su	zu (Zurunga「駿河」)
シャ	xa	ja (Jaca「釈迦」)
シヨ	xo	jo (Jongum Sama「將軍様」)
ツ	tçu	tzu (tzucamatzuri「仕り」)
テ	te	the (Thera「寺」)
ト	to	tho (Thono「殿」)
ワ	ua, va	gua (Guaca Yama「和歌山」)
t入声	-t	-tz (Xichiquatz「七月」)

このことから、『日本王国記』等に見られる特異な表記は複数のスペイン系写本(手稿類)に共通するものだと考えられ、そこから、イエズス会資料とは異なる表記規範の存在が指摘できる。従来の研究では、他のスペイン系写本との共通点については言及がなかったが、本研究によって、これらの特異な表記は筆者アピラ・ヒロン個人の特徴ではなく、スペイン系写本に共通する表記規範に基づくものであったことが明らかになった。

これは、量・質ともに豊富であるイエズス会資料を中心になされてきたキリシタン資料の日本語研究において、これまで顧みられることの少なかったフランシスコ会やドミニコ会、アウグスチノ会等による非イエズス会スペイン系資料の日本語資料としての価値を再評価することにつながる。また、日本布教において先行するイエズス会が確立していた表記法を、後発のスペイン系修道会がどのように受容したのかという通時的な視点においても、問題提起となる発見である。

スペイン人ドミニコ会士コリヤードの著作に用いられているローマ字書き日本語の表記は、概ねイエズス会版本の表記を踏襲したものであるが、一部に特異な表記が存在する。例えばt入声表記は「Xocubut」(シヨクブツ「食物」)のように「-t」が規範的な表記であるが、バチカン図書館所蔵『西日辞書』(コリヤード自筆写本)では「Xocubutç」のように「-t」ではなく「-tç」と表記する特異な例が2例存在する。この特異なt入声表記「-tç」と、コリヤードの版本著作物に共通してみられる例外的なツ表記「zu」(規範ではtçu)に着目し、イエズス会資料や他の非イエズス会スペイン系資料の表記と比較して考察した。

イエズス会資料の表記はポルトガル語式であり、ツは「tçu」と表記する。当時のスペイン語(カスティーリャ語)ではçとzの表記の入れ替えは可能であり、「tçu」を「tzu」に置き換えたのが、非イエズス会スペイン系資料に見られる「ツ=tzu」表記だと考えられる。一方のt入声表記は、イエズス会では「-t」で表記し、コリヤードの資料では版本でも写本でもこれを踏襲する。ただし非イエズス会スペイン系資料の写本では、「-t」ではなく「-tz」と表記するのが一般的である。この事実から、ツ表記における「tçu」と「tzu」の関係をt入声表記の関係に当てはめてみると、非イエズス会スペイン系写本においてt入声表記であった「-tz」の「z」を「ç」に置き換えたのが、コリヤード自筆『西日辞書』に見られる特異な表記「-tç」であると考えられる。

ことができる(表2)

表2

	イエズス会資料	非イエズス会スペイン系資料				
		版本	写本(手稿類)			
			コリヤード『西日辞書』	『日本王国記』、チンチョン報告書		
ツ	tçu	tçu	tçu	←	→	tzu
t入声	-t	-t	t			
			-tç(2例のみ)	←	→	-tz

スペイン人ドミニコ会士であるコリヤードにとっては、写本で使われていた「-tz」の表記に馴染みがあったであろう。しかしコリヤードは版本でイエズス会の表記を踏襲している。写本の「-tz」という表記を版本の表記規範である「-t」に置き換える過程で、ツ表記の「tzu」と「tçu」の関係と混同したか、何らかの手違いによって、写本である『西日辞書』に「-tç」という特異な表記が一部に残ってしまったのではないか。

このことから、コリヤードの資料に見られる特異な表記は単なる書き誤りや誤植ではなく、スペイン系写本で使われていた表記の影響である可能性が指摘できる。また、従来はイエズス会の版本を中心としてそれとの比較という形での研究が行われていたが、イエズス会資料と非イエズス会資料、版本と写本、という関係でそれぞれに比較研究を行うことで、これまで気づかれていなかった影響関係が見えてくることになった。

布教聖省文書館の日本関係文書は、ドミニコ会士コリヤード関係の文書が豊富なことで知られているが、本研究ではフランススコ会士による日本関係文書の所蔵も確認した。そのうち、文書集「fondo SC Indie Orientali e Cina Misc. 15」の第一文書と第二文書(フランススコ会士による1595年の日本関係文書、スペイン語)に見られる日本語語彙のローマ字表記を分析した。第一文書の表記はキリシタン資料として標準的なものであり、スペイン語資料としての特徴は見当たらないが、他のキリシタン資料に共通する頻出語彙の表記には揺れがなく固定化しており、人名表記に揺れが見られた。写筆者にとって馴染みのない語は表記の揺れが大きくなると考えられる。第二文書には、シャ=jaという、既出の非イエズス会スペイン系資料に共通する特異な表記が見られた。

布教聖省文書館に所蔵されている日本関係文書は、16世紀末をはじめとして主に17世紀から19世紀に至るまで膨大な数が存在し、日本語資料としてどのように利用できるかは、今後も継続的な調査と分析が必要である。

(4) 得られた成果の国内外における位置づけ

AESI-A、AFIOの日本関係文書について、松田(1964)と東京大学史料編纂所(1969)記載の旧所蔵番号と現行の新番号との対照が可能になったことで、様々な研究分野の日本人研究者にとって当該資料の閲覧が容易になった。また、両目録に記載の無い資料の情報も追加した。これによってキリシタン手稿類を用いた様々な研究分野の活性化が期待される。

『日本王国記』諸本の章節・丁の詳細な対照は、日本語学のみならず日本史やスペイン史、日欧交渉史、宗教史等の諸分野において、『日本王国記』を利用する国内外の研究者にとって有益な資料となる。本成果の発表後、国外のスペイン史研究者から照会があったことから、その有用性が裏付けられる。

従来の研究では、量・質ともに豊富であるイエズス会資料を中心に、それを規範として他の資料を検討するという傾向があったが、本研究によって、イエズス会の後に日本布教を開始したドミニコ会やフランススコ会、アウグスチノ会によるスペイン系資料が、イエズス会資料の表記規範を受容しつつも、手稿類ではイエズス会とは異なるスペイン系資料共通の表記規範を持っていたということが明らかになった。

この成果は国際学会10th International Conference of Missionary Linguistics(2018年3月、ローマ)で発表した(Atsuko Kawaguchi, Notations in Romanized Japanese: A comparison of Spanish missionaries' texts and Jesuits' texts)。発表後の質疑応答では参加者との活発な意見交換があり、特に発表で参照したキリシタン資料とその資料性についての関心が高かった。日本国内のキリシタン資料研究者にはよく知られている資料でも、国外の外国人研究者には情報発信が不足していることを知った。この成果を国際学会で発表したことで、日本国内でのキリシタン研究の成果を国外に発信することができた。この成果は英語論文として国外の学術誌に投稿する予定である。

(5) 今後の展望

AESI-A、AFIO、布教聖省文書館、マカオ歴史文書館所蔵の日本関係資料を19世紀頃まで概観すると、ポルトガル語やスペイン語、ラテン語、イタリア語といったラテン系言語で本文が書

かれた資料に現れる日本語語彙の表記は、基本的に 16 世紀から 17 世紀初めに確立した表記法が踏襲され、一部の頻出語彙については表記が固定していく様子が見て取れる。例えば、日本語の力行子音については c または q を用いるのが基本である。それが 19 世紀頃の資料になると k を用いる例が見られるようになる。ラテン系言語において k は外来語専用の文字だが、16 世紀以来 c や q で表記されてきたものが、なぜ k で表記されるようになったのか。これは近代以降のローマ字で日本語の力行に k が採用された経緯も含めて、検討が必要な問題である。

本研究の過程で、17 世紀のマカオでイエズス会士が作成した日本語を含む多言語対訳のローマ字資料が、ARSI に所蔵されていることを知った。この資料の存在によって、外国人による日本語のローマ字表記の変遷を明らかにするためには、日本語資料を通時的に観察するだけでなく、同時代における多言語間のローマ字表記の有り様を分析して、その影響関係を探ることが有益であるとの考えに至った。特に 16～17 世紀当時、イエズス会の東アジア布教の拠点だったマカオにおいて、中国語や日本語、ベトナム語などの多言語の言語研究が行われていたという事実は無視できないものであり、マカオのイエズス会士による日本語研究とその他の言語研究がどのような影響関係にあったかを明らかにすることは、彼らの日本語研究の実態を明らかにする上で重要な問題である。この問題は、今後の研究の課題として発展させていく予定である。

文献

東京大学史料編纂所（1969）『日本関係海外史料目録』12、東京大学史料編纂所
松田毅一（1964）『在南欧日本関係文書探訪録』、養徳社

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 川口敦子	4. 巻 29
2. 論文標題 コリヤードのt入声表記とツ表記 スペイン系写本との比較から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 三重大学日本語学文学	6. 最初と最後の頁 1 - 10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 川口敦子	4. 巻 28
2. 論文標題 アピラ・ヒロン『日本王国記』諸本と日本語の表記 チンチョン報告書との比較を通して	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 三重大学日本語学文学	6. 最初と最後の頁 1 - 10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 川口敦子	4. 巻 35
2. 論文標題 旧トド管区イエズス会文書館および旧バストラーナ文書館の日本関係文書のカタログ番号について（2）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人文論叢：三重大学人文学部文化学科研究紀要	6. 最初と最後の頁 79 - 87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 川口敦子	4. 巻 27
2. 論文標題 フランシスコ会イペロ・オリエンタル文書館所蔵ディエゴ・デ・チンチョン報告書の日本文字とローマ字書き日本語	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 三重大学日本語学文学	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川口敦子	4. 巻 34
2. 論文標題 旧トレド管区イエズス会文書館および旧パストラーナ文書館の日本関係文書のカタログ番号について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 人文論叢：三重大学人文学部文化学科紀要	6. 最初と最後の頁 115-129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川口敦子	4. 巻 30
2. 論文標題 布教聖省文書館所蔵日本関係文書について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 三重大学日本語学文学	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川口敦子	4. 巻 31
2. 論文標題 布教聖省文書館所蔵1595年フランシスコ会報告書の日本語表記	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 三重大学日本語学文学	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 川口敦子
2. 発表標題 スペイン系資料のワ行音表記 土井忠生の分析を再検討する
3. 学会等名 第9回キリシタン語学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川口敦子
2. 発表標題 キリシタン資料における会話文の引用形式から
3. 学会等名 「通時コーパス」活用班中古・中世グループ研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川口敦子
2. 発表標題 キリシタン資料の会話文の引用形式 『日本語歴史コーパス』を用いて
3. 学会等名 第10回キリシタン語学研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川口敦子
2. 発表標題 キリシタン資料と『日本語歴史コーパス』 キリシタン資料の概要と課題
3. 学会等名 通時コーパス活用班合同研究集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Atsuko Kawaguchi, Yuki Watanabe, Miwako Murayama
2. 発表標題 Construction and Utilization of the Corpus of Christian Materials (Kirishitan Shiryo)
3. 学会等名 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 川口敦子
2. 発表標題 キリシタン資料が物語る日本語 規範性と特異性をどう考えるか
3. 学会等名 公開シンポジウム2017 にっぽんのことば：外の視点による日本語史研究（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 川口敦子
2. 発表標題 コリャードのツ表記、t入声表記 スペイン系写本との比較から
3. 学会等名 第8回キリシタン語学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Atsuko Kawaguchi
2. 発表標題 Notations in Romanized Japanese: A comparison of Spanish missionaries' texts and Jesuits' texts
3. 学会等名 10th International Conference of Missionary Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川口敦子
2. 発表標題 チンチョン報告書 (AFIO 23-1) とアピラ・ヒロン 『日本王国記』の綴字
3. 学会等名 第6回外国資料研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 川口敦子
2. 発表標題 アピラ・ヒロン『日本王国記』の表記 スペイン国立図書館本とチンチョン報告書との比較から
3. 学会等名 第5回キリシタン語学研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 川口敦子
2. 発表標題 アピラ・ヒロン『日本王国記』（第28章）諸本の綴字 AF10原本、BNE本、ARSI本
3. 学会等名 第7回外国資料研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 川口敦子
2. 発表標題 『日本王国記』諸本のローマ字書き日本語の比較 チンチョン報告書の江戸殉教報告との対応箇所について
3. 学会等名 第6回キリシタン語学研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 川口敦子
2. 発表標題 天草版『平家物語』の注記記号が持つ意味
3. 学会等名 日本語学会2015年度秋季大会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 川口敦子
2. 発表標題 Diego de Chinchonによる殉教報告書に見える日本文字について
3. 学会等名 外国資料研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 川口敦子
2. 発表標題 フランシスコ会イペロ・オリエンタル文書館所蔵 ディエゴ・デ・チンチョン報告書のローマ字書き日本語と日本文字
3. 学会等名 第4回キリシタン語学研究会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>Cotonofa https://akawaguchi.exblog.jp/ (情報発信用ブログ) 川口敦子, 「16世紀のヨーロッパ人宣教師が作った日本語の本」, 愛知県立大学ミニ公開講座「はじめての外国資料」, 2019年</p>

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考